



TITLE:

多民族共住の居住空間デザイン -  
マレーシアの地域社会を事例とし  
て( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

宇高, 雄志

---

CITATION:

宇高, 雄志. 多民族共住の居住空間デザイン - マレーシアの地域社会を  
事例として. 京都大学, 1997, 博士(工学)

ISSUE DATE:

1997-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/202277>

RIGHT:

氏 名	宇 高 雄 志
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	工 博 第 1575 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	工 学 研 究 科 環 境 地 球 工 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	多民族共住の居住空間デザイン —マレーシアの地域社会を事例として—

論文調査委員	(主 査) 教 授 三 村 浩 史	教 授 小 林 正 美	助教授 布 野 修 司
--------	----------------------	-------------	-------------

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、多民族の共存する居住地計画のあり方を求めて、典型的な多民族居住地を有するマレーシア国を研究対象として、居住地構成と居住実態の精査をとりまとめ多民族共存空間の計画方法を考究したものである。

本論文は4編8章からなっている。

序章では研究の目的・方法と明確な民族的差異を有する多民族が格差を有しながらも安定的に共存しているというフィールド選定理由について述べている。

I編2章では、多民族社会について蓄積の豊富な都市社会地理学での文献を総括し、多民族混住に内在する移民と定住、異文化接触の軋轢と受容、混住・住み分け政策などの諸問題を明らかにしている。

II編3章では、同国の統計資料・諸研究をもとに、植民地支配下に始まり現在に至る多民族社会の形成過程と、経済成長を支える民族融和政策のもとでの混住誘導策を整理している。その結果、現在の国土レベルでの民族構成の偏在(農村=マレー系、都市=中国系、インド系)が植民地経済の展開下で規定され、近年の経済成長下で流動しながらマレー系の都市流入による混住化が進行していることを指摘している。

III編は本論文の骨格であり、多民族居住の実態と集住空間構成の結果をとりまとめている。同国の多民族居住の様相が混住誘導の有無、居住密度、民族構成に規定される点に注目して、人口密度の低い地区の例としてマレー系の単一民族村落(4章)、多民族混住村落(5章)、高密度地区の例として多民族混住の都心タウンハウス地区(6章)および、混住が政策的に誘導される新興住宅団地(7章)について、それぞれ詳細なモノグラフを作成している。それらの考察を通して、次のような主な結果を導いている。

①、多民族混住の様相：低密な村落では村落毎の単一民族の純化が見られ、混住村落であっても単一民族が優越集住する小規模な「民族界限」を形成している。高密度都心部でも「民族界限」が観察され、それらが相互に密接な社会関係を保ちつつ、多民族共存を実現している。また民族融和政策上の民族混住が積極的に誘導される住宅団地においても団地内で住み替え集中による「民族界限」形成への指向が見られる。

こうした単一民族への純化が指向される小規模な「民族界限」が緩やかに連結して多民族混住居住地を形成している。高密な都市部では界限の空間的性格の遷移が緩やかな境界を形成している。

②、多民族コミュニティの様相：同国に併存する民族集団は、社会活動の上では民族の禁忌を侵さない程度に密接な関係にありながらも、信仰や民族団体は分立し、政治、経済活動の重要な規定要素となっている。混住誘導された住宅団地では、行政が主導する多民族コミュニティがあるが低調であり、街路など共同空間の維持整備には無関心である。一方で近年の生活様式の変化にともなって、スポーツ活動など民族に関係なく受容され多民族交流の好機となっている。

③、民族性の居住空間への反映：民族独自の居住文化は、住居様式の相違につながっている。混住村落にみる住居様式でも、同じ環境条件下にありながらも民族毎に異なる生産組織・建築形式・住様式を有する。民族固有の居住地様省は都市生活者にも継承され、画一的住戸が供給される住宅団地においても、居住者自身がしつらえの変更や改造を民族性を反映しておこなっている。それらの民族性表出の集積が「民族界限」の性格を決定し、民族集団の象徴としても機能する。

以上から、マレーシアの多民族社会における居住地では、個々の民族性を咀嚼しつつ空間的に具現する「民族界限」が民族集住単位として緩やかに相互連結して、全体として「共存的住み分け」が実現していることが把握され、「民族界限」単位の多重で緩やかな連結を基礎とした居住地計画の方法が新しい団地計画にとっても有効であることを指摘している。

Ⅳ編8章では、結章として理論の整合性を検討し得られた知見から多民族共住の空間デザインの新しい枠組みを示している。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、国際化する地域における多民族が共住する居住地計画のあり方を研究したもので、世界的にみても多民族の複雑な均衡を実現しているマレーシア国をフィールドとして生活空間の構造を解明したもので、得られた主な成果はつぎの通りである。

1. 混住パターンから見た4つの類型地区、すなわち人口密度の低い地区の例としてマレー系の単一民族村落及び多民族混住村落、高密な地区の例として、多民族混住の都心タウンハウス地区及び混住が政策的に誘導される新興住宅団地を選定して、居住様式の差異と住戸・近隣の入り交りの実態を精査して、詳細で正確なモノグラフを作成している。

2. 同一民族の世帯が緩やかなまとまりを持って集住する「民族界限」が成立していることを見だし、その求心力としては、祭祀と儀礼、慣行と生活リズム、住居設営と町並みで表出されるアイデンティティが作動していることを明らかにしている。

3. 居住地はいくつかの「民族界限」の集合体で構成されるが、それらの相互の境界ゾーンが、調整と分離の機能を果たすことに着目している。境界領域は、低密度な居住地では分離帯として、高密な居住地では相互が重なる調整融和帯として運用されていることを見だしている。

4. 多民族居住の様相は、民族構成、居住人口密度及び住居宅供給における政策的混住誘導の有無の要因に規定されていることを導いている。このことから民族融和のためには混住促進を是とする通説に対して

3 要因を考慮する「共存的住みわけ」が適切な方向であることを示唆している。

以上、本論文は、多民族化する居住地計画に新しい知見を付与するもので学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成 9 年 1 月 27 日、論文内容とそれに関係した事項について試問を行った結果、合格と認めた。